名所物見の旅　其の六拾参　奥日光の魅力　I

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

今年は九月に大きな台風が二つも本州に上陸し、各地に平成になってからは最大といわれる甚大な被害をもたらした。影響は秋の紅葉にも及び、日本アルプスなどの高山帯では台風によってナナカマドの葉が飛ばされてしまったり、南の空気が入り込んで高温の日が続くといった要因が重なり、素晴らしかった昨年に比べ今年の紅葉はほぼ見るべきものなく終わってしまった。それでも10月中旬以降に色づく中腹周辺では案外悪くなかったことに加え、もうひとつ思わぬ拾い物があった。日本を直撃した台風12号および15 号による大雨で、奥日光小田代ヶ原に水が入って“幻の湖”が出現したのである。このニュースは新聞やテレビでも話題になっていたので、記憶されている方も多いだろう。湖出現は四年ぶりのことなので、“幻の湖”はちょっと大袈裟ではあるが、テレビ画面には例年ならば草紅葉が美しい湿原に満々と水が湛えられている様が映し出されていた。数年に一度あるこの現象はふつう一ヶ月ぐらいで水は引いてしまうのだが、今年はかなりの水量があるので水が引く気配はないとの情報を得て、11月に入ってから撮影に出かけてみた。

奥日光の森や湿原の間には縦横に渓流が流れ、風景のよきアクセントとなっている。この石楠花橋付近の湯川は、すぐ下流で“竜頭の滝”となって中禅寺湖に注いでいる。

奥日光では平成5年から自然保護のため、小田代ヶ原から千手ヶ浜（せんじゅがはま）一帯への車両乗り入れが規制されており、その代替として国道20号沿いの赤沼車庫から低公害ハイブリッドバスが運行されている。このバスはエンジンに発電装置とモーターを内蔵し、ブレーキ時に発生するエネルギーを蓄えて発進や加速時にエンジンの補助をするといった優れものである。低公害バスを利用すれば脚力に自信のない人でも行動範囲は広がり、西ノ湖などかなり奥まで足を延ばすことができる。自然環境保護の観点から、車の乗り入れを規制して低公害バスを運行する方針は、排ガスによる自然への悪影響を最小限に留められ、大いに評価できるものである。全国各地でこうした方式が普及すれば、自然のど真ん中に作られた駐車場に車を止めて周囲をちょっと歩いておしまいといった従来型ではなく、より自然環境を守りながら自然に親しむ時間を増やすといったことにつながる。ラムサール条約に登録された奥日光の湿原には縦横にトレッキングコースが整備されているので、観光客やハイカーは日程や体力に合わせていろいろなコースを選べるのもうれしいことである。戦場ヶ原などの遊歩道を修学旅行の小学生たちが歩いているのによく出くわしてほのぼのするが、これはきちんと整備された遊歩道のおかげであり、子どもたちがこうして自然に接する機会が与えられるのは重要なことだと思う。

日光・小田代ヶ原に出現した“幻の湖”と日光連山。湖は4年ぶりの出現であるので、メディアがいう“幻の・・・”といった表現はややオーバーであるが、今回は非常に水量が多いので水が引く気配はなく、厳冬期には氷結した湖を見ることが出来るかもしれない。

低公害バスは4月から11月下旬まで様々なスケジュールで運行されており、今回の撮影で訪れた11月は土日に限って早朝4時半および5時の2本が運行されていた。このどちらかのバスに乗れば、日の出前に小田代ヶ原に到着できる。赤沼車庫から小田代や千手ヶ浜まで一律300円の料金で運行しているので、バスを利用すれば暗い夜道を歩かないで済む。バスの発車時刻は季節ごとに変わるので、乗車する際は事前に調べておくとよいだろう。当然のことながら、早朝バスに乗るには前日に奥日光のどこかに泊まっておくか、赤沼駐車場に自家用車を止めてバスを待たなければならない。何年も前に日光湯元温泉に泊まった時は、暗いうちに宿を出て早朝バスに乗り、朝の撮影終了後急いで宿に戻って8時半過ぎに朝食にありつくといったずいぶん忙しい思いをした。今回は車に泊まる予定で、食料や寝袋持参で前夜に奥日光に入った。4時30分のバスに間に合うように起きだしてのんびりとコーヒーを飲んでから外に出ると、いつの間にか赤沼駐車場には車がかなり増えていて、バス発着所にはすでに一番のバスに乗るべくたくさんの人が集まっていた。早朝バスに乗る人はほぼ全員が写真愛好家であることは間違いなく、誰もが三脚を持っている。

まだ真っ暗な中を発車したバスは進入規制のあるゲートを抜け、歩けば50分の道のりをたった12分で小田代ヶ原まで運んでくれた。バスを降りると皆争うように三脚を立て始め、小田代ヶ原を正面に見るお立ち台テラスはあっという間にいっぱいになってしまった。しかしここは邪魔な木があって、前景があまりよくないように思える。まだ日の出まで時間があるので、もう少しよいアングルはないかと探して歩いてみると、湿原から離れた道路の石垣の土手の上も人でいっぱいだ。こちらは“貴婦人”と呼ばれる小田代ヶ原にある一本の白樺を狙う人たちのようで、みな一様に望遠レンズをつけて日の出を待っている。“貴婦人”にスポットライトが差し込むような僥倖を待ち構え、一年に何日も通っているカラマンもたくさんいるという。

いろいろ探し回った結果、木道が浸水した箇所があるためにロープが張られた先に気に入ったアングルを見つけて三脚を立てた。この場所は足下の木道上部まで水が満ち、湖の中に立てた三脚はかなり水の中にもぐってしまうので、背の高い大型三脚でなければ用を足さない。予想以上の水量に驚き、ひょっとすると面白い写真が撮れるのではないかと期待して夜が明けるのを待った。

日の出二十分くらい前になって薄明るくなると、“幻の湖”は青一色につつまれ幻想的な風景を見せ始めた。気温は摂氏3度とあまり下がっておらず、ほとんど寒さを感じないので手袋の必要もないくらいだ。日の出が近づくと“幻の湖”に日光連山と茜色にトーンを帯びた雲がくっきりと映り、その美しい色彩はモーションピクチャーのようにどんどん変化していく。何枚か撮るうちに霧が湧き出して、やがて湖を覆いだした。ほどよい霧は大歓迎だが、ちょっと多すぎるきらいがあり、時々山も見えなくなってしまうので気が気ではない。やはり気温の高いのが影響しているのかもしれない。日が昇ると霧は晴れてきたが、今度は風が出て鏡のようだった湖面は揺れ、山をまったく映さなくなってしまった。まことに残念ながら、そこで撮影は終了した。しかしどうにも後ろ髪を引かれる思いが残る。条件さえよければこの“幻の湖”は絶対絵になりそうなので、このあとも続けて週末に撮影に訪れてみた。最後はバスの運行が終了した11月下旬だったので、小田代ヶ原まで赤沼駐車場から歩かなければならなかった。舗装されたバス道を歩くのは味気ないので森の中のトレッキングコースを歩いてみたが、これが案外楽しい道のりだったのである。月夜に照らされヘッドライトも不要なくらい明るく、木々の影がくっきりと地面に映ってなんとも幻想的な情景を醸し出し、そんな中をひとり歩くのは乙なものだった。まるで山の画家「辻まこと」が描く絵の中を歩いているような気分になった。小田代ヶ原に到着するとすでに十数人のカメラマンがバス道沿いを歩いて到着しており、なかには自転車で乗り入れている人もいる。道路が雪に覆われるまでは、この手も大いに利用できるだろう。

結局11月の毎週末撮影にチャレンジしたものの、毎回決まったように日の出とともに風が出て、思うような結果は得られなかった。しかし2月頃の厳冬期になれば結氷した湖が見られるかもしれないと、新たな期待をしているのである。

“幻の湖”出現のニュースによって、小田代ヶ原に並んだカメラの砲列。なかには三脚の場所争いで、小競り合い騒ぎまで起きていた。

小田代ヶ原の“貴婦人”と呼ばれる一本の白樺。光線や霧の状態によってはドラマチックな情景が演出されるといわれ、傑作を狙ってこの白樺の撮影だけに通い続ける人も多い。